

宇宙へ始まりはこの海岸

探訪 @ 茅ヶ崎

茅ヶ崎と宇宙——。そのつながりは深い。これまでに野口聡一さん、土井隆雄さんと2人の宇宙飛行士が輩出。そのゆかりから市民団体が「宇宙記念日」を定めたり、市が子ども向けに宇宙教室を開いたりしている。そんな茅ヶ崎と宇宙の歴史をたどりに、始まりの場所へと向かった。

茅ヶ崎海岸は白波を立てうねっていた。浜辺に人影はない。波打ち際を辻堂方面に歩いていくと、大人の丈ぐらいたるるか、銀色の碑が視界の片隅に入ってきた。ひっそりと立つその碑には、「日本初ロケット火薬実験の地」と記されていた。

戦争の足音が近づき始めた1934年、1人の日本海軍の火薬技術者が宇宙を夢見て、一度だけ、手作り

のロケットをこの海岸で飛ばしたことがあったという。海に向かって発射されたロケット。だが、途中でその先端は大きく向きを変えた。ロケットは戻ってくるような軌道を描き、浜辺を大きく

越え、防風林に突き刺さるように落下した。これが日本で初めてといわれる「宇宙ロケットのための火薬実験」となった。技術者の名は村田勉博士。後に「日本の宇宙開発の父」と言われた

糸川英夫博士らが開発し、国産ロケットの源流となった「ペンシルロケット」の推進薬を提供した。

この火薬実験の話を、東京・恵比寿駅近くのピアホールでジョッキを傾けながら聞いたのが、糸川博士の弟子的川泰宣・宇宙航空研究開発機構（JAXA）名誉教授（74）だった。実験から半世紀が経った、今から30年ほど前のことだ。

「火薬の威力を知りたくてね。知る限りでも、日本で初めての宇宙を目指したロケット実験だっただろうね」。そう話す村田博士の口調は、控えめでつつましかったことを的川名誉教授は覚えている。「ロケットに関わる記念碑は全国に幾多とあるけど、村田先生の、茅ヶ崎の碑がその中でも一番古いものでしょう」

日本の宇宙への挑戦のあけぼのに茅ヶ崎という地が深く関わっていたことを後世に伝えたい——。碑はそんな願いを込められ一昨年、市民の

寄付100万円によって2本建立された。ペンシルロケット打ち上げから60周年の年でもあった。そのなかで中心的な働きをしたのが市民団体「ちがさき宇宙フォーラム」だった。会長を務める前川義憲さん（69）は「宇宙教育事業に取り組んできた土壌が、100万円という寄付を集められたんだと思います」と振り返る。

茅ヶ崎出身の宇宙飛行士野口聡一さんの応援団が前身。前川さんはスペースシャトルに日本人で初めて搭乗した毛利衛さんを講演に呼ぶため「宇宙少年団」を発足させたり、野口さんの地球への帰還日を「宇宙記念日」として、2006年から宇宙教育の催しを毎年開催したりしてきた。今では市の主催事業となり「宇宙教室」として年3〜4回開かれるまでになった。

前川さんには印象深い経験がある。宇宙少年団の子どもたちと土星を観察していた時のこと。望遠鏡をのぞき込んだ小学高学年の女の子がうれしそうに声を上げた。「ねえ、あの輪っか、腰掛けられるの？」

宇宙という世界に目を向けることによって育まれる、未知への好奇心や想像を膨らませる力。それがきつと、子どもたちの将来の財産になると信じている。「記念碑も宇宙に興味を持つ一つのきっかけになればいいですね」

（永田大）



「記念碑はペンシルロケットを模した棒に茅ヶ崎のイニシャルのCです」と前川義憲・ちがさき宇宙フォーラム会長が説明してくれた



的川泰宣JAXA名誉教授 川横浜市磯子区